日本建築学会催し物

第４回カルチベートトーク「アーティストの彦坂尚嘉さんと語る、こたつ問題 1970～2009／建築と美術のあいだ」関連資料

１．「こたつ問題」の出現（８月前半）

▶アート・スタディーズと建築系ラジオのメンバーが越後妻有アートトリエンナーレ作品番号 153「みんなのこたつ」を見学。同日夜、建築系ラジオ「欠席裁判」の回、収録（2009 年８月 11 日）

▶五十嵐太郎さんがブログ「Twisted Column」にて「こたつ問題」と命名（2009 年８月 13 日）。
「さて、あまりこういうことは書きたくないのだが、mvrdv の農舞台の真横にある大杉哲也＋伊藤友隆／pop-up-tokyo の「みんなのこたつ」は、とても良くなかった。個人的に、tepco の「アイデア」・コンペの審査員として彼らの案を二度も入賞させたことがあり、そのプレゼンテーション能力の高さはすばらしいと思うのだが、その一方で実際にモノをつくるという現場においてすさまじい乖離を露呈している。出来ないこと／こだわりがないことを提案するのも良くないし、それを公募で選ぶのもまずいかもしれない（自省をこめて）。なぜ、この作品がまずいのか、いや建築界の問題でもあるのだが、これについては建築系ラジオを収録したので、後日配信します。とりあえず、これを「こたつ問題」と呼ぶことにした。」

▶建築系ラジオから「建築系ラジオ緊急謝罪会見「『こたつ問題』欠席裁判」」の回、配信（2009 年８月 15 日）。
35A: 建築系ラジオ緊急謝罪会見「『こたつ問題』欠席裁判」（建築系ラジオ-2 部）(2009 年８月 15 日 01:06)
建築系ラジオから大事なお知らせがあります。アート・スタディーズと建築系ラジオによる越後妻有アートトリエンナーレの合同ツアー3 日目の夜、山田幸司さんによる謝罪会見がありました。そしてある問題作をめぐり、通称「こたつ問題」の欠席裁判へ。建築系ラジオが送る「出会い系カフェ問題」以降、最大の問題作。今後のアイディアコンペのあり方の是非も含め、美術系と建築系のメンバーが混じって討議します。果たしてその行方は？（2009 年８月 11 日、越後妻有津南エリアかたくりの宿にて）。出演者：五十嵐太郎（裁判官）＋山田幸司（検察側）＋松田達（弁護側）＋彦坂尚嘉（参考人）＋太田丈夫（裁判員）＋田嶋奈保子（裁判員）＋杉浦貴美子（裁判員）

▶2009 年８月 15 日、You Tube の動画、公開（木村静）。

２．ブログやツイッターでの反応（８月後半）

▶かなり前から思っていたことが、やっとある公共の場で取り上げられている
単にアート系コンペに限らず、建築系アイデアコンペで起こっている問題も同時に象徴しているのではないかと思う
（Musabi Diary - key_t -「こたつ問題」。８月 15 日）

▶「こたつ問題」の一番の弁護はある程度「笑い」に変える事だと思う。そういう意味では建築系ラジオの放送自体弁護な気がする。
（高木翔（kureator） on Twitter。８月 17 日）

▶でも、第三者、と言っても業界関係者が作者不在で批判しまくってるのってなに？
鑑賞するこちら側に悪いようなコメントしてるけど、それでもやっぱり鑑賞する側（消費者）を馬鹿にしてない？
途中に聞こえる薄ら笑いみたいのがキモイ！！
こんなの公共のネットに流さないで欲しい！
本当に内輪だけのノリみいなのは勘弁して欲しい。。。
まったくの素人または、１人で批判するなら別にかまわないけど。。。。
作品にがっかりさせられて、その後にまたがっかりさせられて残念！！
（建築系ラジオへの初の直接的な批判。HALFCAB「こたつ問題」。８月 18 日）

▶「こたつ問題」は、「建築力を伴わない SANAA ワナビーを許す建築コミュニティの問題」なのかもしれない
（身辺メモ「建築系ラジオ＆村おこしアートの悲しみ２」。石川初。8 月 18 日）

▶以前の放送で「こたつ問題」があって、美術関係者の方はおそらく鑑賞物としての完成度の高さを考慮して挙げられていたと思うのだが、山田幸司さんの指摘にもあるように山本さんに限らず、建築系参加者のヴォキャブラリーの少なさが問題だと感じた。
（http://kureator.tumblr.com/。8 月 20 日）

▶こたつ問題は、空間を視覚的なイメージ(それを体験などと言ったりもする)だけで価値付けようとする昨今の風潮の逆説的かつ極端な帰結である
（Twitter。mg54tw。8 月 22 日）

▶こたつ問題はモノ自体の問題に対する議論であるよりも、こういうモノを問題として取り上げる状況に対してこそ議論の余地があるのだと思う。
（Twitter。mg54tw。8 月 22 日）

▶選ばれるってのは、批評されるってこと、だと思う。彼らは批評されるところまでいった。それは僕からすればものすごく価値があり、光栄なことだと思う。だから、友人として、これにめげずにぜひ頑張って欲しい。
（放浪記「ガンダムとこたつ問題」。8 月 24 日）

▶こたつ問題は「作品を物質としてちゃんと完成させる」という本題を離れ、「審査委員の問題」、「1/1 で考えていない」、等々いろいろな問題提起にもなっている。その中でも「自分が作る物へのこだわりや気持ち」が軽く、無くなってきているのが一番の問題なのだと僕は思う。それは SANAA のスタイル（白く、とても軽い）という表層だけを模倣し始めたことが、作品の表現にとどまらず、模倣した制作者の思考・思想、作品へのこだわりや気持ちにまで昇ってきているからではないかと思う。
（Musabi Diary - key_t -「思考・思想までも軽くなる」。8 月 26 日）

３.「こたつ問題」と「建築系ラジオ」への賛否（9 月前半）

▶建築系ラジオから「オープンデスク学生との本音トーク「夏のオープンデスクを終えて」」の回、配信（9 月 3 日）
夏のオープンデスクで事務所に来ていた学生の最終日のお別れ会にて、二週間の研修を終えた感想や、最近の建築界で感じることなどについて、自由に語ってもらいました。オリジナルとコピーの問題から、プライベートとオフィシャルの問題まで、3 人の学生とのぶっちゃけトークです。1 時間を大幅に越えるこれまでで最長のコンテンツですが、議論の内容はしっかりしているので、そのまま配信します。ここまで学生が主役になったコンテンツは初めてかもしれません。25 分頃から、ある問題に焦点を絞って話をしています（2009 年 8 月 30 日、松田達建築設計事務所にて）。出演者：松田達＋角田博由起（呉工業専門学校）＋亀田浩平（新潟大学）＋多田啓太郎（千葉大学）

▶これに対する建築系ラジオの批評性に対する批判や、非難が起きる事自体は良いと思いますが、その中に批評の自由や、言論の自由に対する配慮が無い事が気になります。批評や言論と言うものは、不愉快なものなのです。リスナーが自分にとって不愉快なものを非難し、排除しようとする、素朴なまでのフロイトの言った快楽原則的な反応は、その素朴さそのものが、こたつ問題の本質を指し示しています。素朴なまでの建築性の欠如と、素朴なまでの批評や言論への視点の欠如であります。
（彦坂尚嘉の〈第 41 次元〉アート 2「こたつ問題 2／五十嵐太郎氏のコメントあります」。彦坂尚嘉。9 月 4 日）

▶＜35A: 建築系ラジオ緊急謝罪会見「『こたつ問題』欠席裁判」＞は配信されるべきでした。理由は、僕の先の２通のメールにも書いていた内容とプラス、配信しないと、だれも問題に気が付かないのと、制作者にこれほどの反応を返すことができるメディアは他にないからです。音声を聞くだけで（表面的な反応）は、個人攻撃に聴こえてもおかしくないですが、裏を返せば、

コアメンバーの皆さんの危機感や、それに伴う愛情を感じます。文章ではなく、話し合おうという姿勢があるので、配信に関しては問題ないと思います。出演した学生も、考えることができたと言っていますので、成果はでているのではないでしょうか？ただ、３７B の配信で気になったのは、リスナー側の反応です。僕自身、１通目のメールで批判に同感する内容を書きました。３７B の会話に参加された学生さん達も、同じ反応です。話し合いを続けて行く過程で、攻撃性が和らいできたように感じますが、僕も含めて言えるのは、「メディアから得た情報だけで対象への攻撃行動に参加する危険性」に気づきました。学生さん達と僕の共通点は、実物を見ていないということです。なのに、すごく攻撃的になっています。おそろしいですね。集団心理。自分の事として情報を処理できないんです・・・。
（リスナーからのメール「[建築系ラジオ]コメント：37B: オープンデスク学生との本音トーク「夏のオープンデスクを終えて」の感想です。(武智仁志)」。武智仁志。9 月 5 日）

▶こたつ事件のいきさつが作者のブログから消えてる。別にいいけど。彼らからの建築系ラジオに対する反論があってもいいと思う。というかするべきだと思う。これじゃあ一方的にいじめてる様にも見えてまうやん。違うやろと。
（木村　シンヤ（kmrsny）　on Twitter。9 月 14 日）

▶建築系ラジオ聞きおわり。「こいつら、謙虚じゃない」という一言に尽きるかな。そこが「建築家」の魅力の源泉なのですけど。
ただ飲んだくれてるだけじゃないかい?もう少し謙虚に語ってほしいよ…。
（けとらす（ketruss）　on Twitter。9 月 16 日）

▶「わざわざ名古屋から出てきたのに」「3000 円も払ったのに」「東大なのに」それ、全っ然批評じゃないです。みなさんお嫌いの「思考停止状態」そのもの。今回、彼らが東大生じゃなければこんな言われ方されなかったかしら？無料だったら？会場が近かったら？（まあ東大＝最高峰なんだからおまいらちゃんとしろよ、という、東大ブランドのイメージに則った期待感はわからなくもなけど、鬼の首とったかの如く pgr してんのは、聴いてる方としてはかえって微妙)。(中略）とにかく私は「こたつ」という駄作よりも、ラジオの中でのこの問題の「語られ方」のほうに、ずっと大きな関心を持ったので「「こたつ問題」を如何に語るか問題」になったわけです。それが狙いだったんです、裏テーマだったんです、って言われちゃいそうねw「「こたつ問題」を如何に語るか問題」の本質は、建築クリティックの人材が少ないことだと思う。せっかく音声によるメディアが作られたのに、こたつの放送を聴く分には「この程度かよ」と思わざるを得なかった。今、日本の代表的な建築批評ってこんな感じです、って誰かに紹介するには恥ずかしい。人選、放送のプログラムといった番組制作側の問題かも知れないが、それ以上にまず、有能な批評家が少ないんだろうなと。五十嵐さんは、自分以外の書き手が足りないことを 10 年くらい前から問題としていたけれど、現在もその状況はあんま変わってない。
（mosaki 的東京経験値「「こたつ問題」を如何に語るか問題」。田中元子。9 月 18 日）

４．「こたつ問題」から「こたつ事件へ」（9 月後半）

▶ただし、僕は混在したハチャメチャぶりこそがラジオの醍醐味だと思っており、mosaki の意見とは違う（座談会だって相当リライトしてしまう紙メディアや、事前にかなり台本が作成される NHK など、既存のメディアとまったく同じ評価軸を導入するべきではない)。むしろ、彦坂さんの山田さんに関する最新のコメントに近い。(中略）こたつ問題は、批評をドライブさせる装置になっている。紙メディアの古参で「権威」とされる、新建築が送りだす越後妻有トリエンナーレのレビューは、エレベータ・ミュージックのような公共的なテキストだが、これこそが「正しい」批評なのだろうか？（当たり障りはないけど)。ネット上の反応を見て、おもしろいと感じたのは、どうも若い人のほうが、批評について保守的なイメージをもっていること。最近の紙メディアの言説がモデルになっているのかもしれない。が、メディアが異なれば、言説のあり方も変化する。
（Twisted Column「1715：こたつ問題から事件へ」。五十嵐太郎。9 月 19 日）

▶しかし山田幸司さんのもつ、この生々しさこそが、今日のマスメディが失ったものなのです。昔の明治期の新聞には、こうした山田的な生々しさがあったのです。たとえば、夏目漱石の書いた美術批評ですが、憎悪をこめたかの様な、悪口が口汚く書かれていて、その生々しさは、すごいものです。それが，いつの間にか、個人の私的な意見を削除するようになった。日本のマス

メディアの活力の喪失は、実は山田的なものを失ったからです。批評というのは、公的なものではなくて、個人的な意見の発露なのです。その意味では２ちゃんねるは、批評性の原点なのです。ただ２ちゃんねるが残念なのは、匿名であることです。山田幸司さんは、実名で、しかも建築家であって、自分の責任で語っているのであって、その個人的な見解は、批評たり得ていると彦坂尚嘉は考えます。(中略) 山田幸司さんは、その意味で私の好きな語りを展開するすぐれた才能の持ち主です。だからこそ、殺されるかもしれませんね（笑)。社会と言うのは、私性を持って語る現論人を憎んで、殺して来ているからです。
（彦坂尚嘉の〈第 41 次元〉アート２「山田幸司さんと建築系ラジオ」。彦坂尚嘉。9 月 19 日）

▶正直、作品は酷いものである。責任感のなさを露呈し、今後自分の名前で活動はほぼ不可能に近いであろう。ただ院生、東大というキャッチーなターム。的を射ない発言の連呼。笑いの応酬。べつに叩くことは悪いことではない。ネットで叩かれるだけましだし、作品を叩くことなどは昔からよくある。しかし、根本的な問題を捉えきれてない建築家等の発言が幼稚である。それなりの長い時間をラジオにかけるのであれば、学生でももう少し議論を膨らませることはできる。もう少しネットサーフィンをしてみたが、この配信自体が問題になっていることがどうのこうのとラジオ出演者等のコメントを多数発見。批評がどうこうだとか、笑いがどうこうだとか。配信自体に愛を感じるだとか。なんだかね。作品やラジオの内容がどうのこうのというよりも、この作品が建築界を象徴し、討論会自体が建築界の現実である。
（dislocated passage「こたつ問題」。9 月 19 日）

▶山田さんの「喋り」調子を批判（非難）する意見の「根拠」として、しばしば「ラジオという媒体で配信するべき内容の水準に達していない」から、と述べられているのを見かける。「むしろ語り方問題のほうが深刻だ」とまで表明してるものもある。でも「ラジオ」と銘打っているものの、あれは電波で番組を放送する従来の意味での「ラジオ」じゃなくて、音声ファイルをブログに掲載してるだけの「ポッドキャスト」である。あれを「公共の」というなら、細かい内容まで検索にインデックスされて蓄積されてゆくブログや BBS のほうがよほど公共的な情報であって、かつよほど低俗で劣悪な誹謗中傷に満ちているが、それに「作法」を要求するのはまるで「ブログだって公共のネットに公開しているなら、そのへんのマクドナルドでケータイで入力なんかするな。机に向かって正しい姿勢でテキスト作成しろ」と言っているみたいに聞こえるが。（中略）批評についてのイメージもそうだし、若い人ほど、引用の仕方だとか語り口だとかに対して、「ネットリテラシー」とか「モラル」などと言って、察してやれよ的な物言いをしているような気がする。オヤジが暴走しているのか、キッズがやけに射程距離の短い「空気読む世代」なのか。もちろん、オヤジをオヤジたらしめるのは、多少の社会秩序にもとることをしても周囲には叱る人なんかいない、という開き直りというか甘えでもあるのであって、キッズもあと１５年もすればみんな空気が読めなくなってくるのかもしれないが。
（身辺メモ「村おこしアートの悲しみ３」。石川初。9 月 22 日）

▶つまり失敗作や駄作を、自分自身が愛する事で重要です。だれも駄作や失敗作を愛してくれないのですから、作家自身が愛する以外には、ないのです。失敗作を作家自身が愛する時に、ピンチがチャンスに反転する奇跡が生まれるのです。
（彦坂尚嘉の〈第 41 次元〉アート２「こたつ問題の真実！」。彦坂尚嘉。9 月 22 日）

▶こたつ問題配信への批判は散見されるが、自覚的に行われた「欠席」裁判を叩きながら（相手に直接言わないのはひどい！と述べている)、その書き込み自体が公開されている建築系ラジオのアドレス宛にメールをださず、欠席裁判を無自覚に反復するタイプが多い。
（Twisted Column「1720：気がつくと 10 年」五十嵐太郎。9 月 25 日）

▶建築系ラジオに関しては、極めて実験的な部分があり、通常の紙メディアで伝えられないことを、伝えてみようとしています。紙メディアの言葉を、正しい言葉と考えた前提でラジオを聴くと、確かに議論の態度がなっていないと聴こえるかと思うのですが、今回の配信に関しては、ある意味、こうやって意見が分かれて、はじめてモラルについて、メディアについて、議論ができるという場が生まれたのではと思います。（中略）相手を理解した上で、批判するのと、相手を理解できないから、批判するのでは、大きく意味が違うかと思います。後者の場合は、自分の立場を主張するだけで、相手からも理解されにくいので。違う意見を取り入れながら、視野を広げることは悪いことではないのではと思います。
（Jacques Ta2「524：architecture and moral（建築とモラル)」。松田達。 9 月 26 日）